

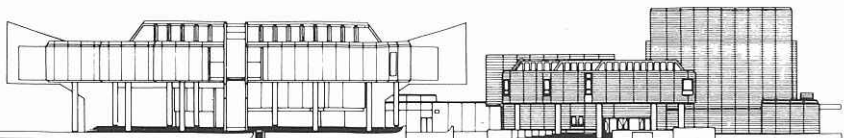
1633年 アムステルダム刊 支那・日本図 (部分)

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

16 May 1994

No. 105



展覧会案内

平成5年度 博物館新収蔵品展

会期：5月27日(金)～7月10日(日)

博物館3号展示室では、平成5年度に新たに収蔵した資料を展示した「平成5年度新収蔵品展」を開催しています。

展示資料の主な内容は、美術工芸資料では狩野山雪筆の蝦蟇・鉄拐図2幅(17世紀江戸時代)、鍋島小紋袴地杏葉三ツ紋(江戸時代後期)、宮田勝貞作の竜図打出胸当(1721年江戸時代)など9件、歴史資料では蓮池藩直直島村周辺絵図など7件、考古資料では浜玉町谷口古墳出土の「吾作」銘三角緑三神三獣獣帯鏡(複製)1件、民俗資料では明治から昭和時代の前半にかけて使用された蠅づくり用具一式1件、自然史資料では恐竜の化石など7件となっています。今回は新収蔵品展の展示資料の中から、特に近年関心を集めている恐竜の化石を御紹介します。

恐竜は、今からおよそ2億4000万年前から6500万年前まで続いた中生代と呼ばれる時代に生きていた生物で、当時の地球は恐竜の惑星であったと言っても過言ではないでしょう。その繁栄と劇的な絶滅には、科学的興味だけでなくロマンすら感じられます。私達人類はほんの150年ほど前まで、かつて恐竜という巨大生物がこの地球上に存在していたことすら知らなかったのです。

1 竜脚類の大腿骨



写真は、アメリカ合衆国ワイオミング州の中生代ジュラ紀(約1億5000万年前)の地層から産出した、恐竜(竜脚類)の大腿骨の化石です。長さは140cm、両端が一部消失しているため、実際には160cmほどあったと思われます。

竜脚類の恐竜には、主に大型の四足歩行性植物食恐竜が含まれます。この大腿骨の化石だけでは、種類を特定することは困難ですが、同じ地層から中型の竜脚類であるカマラサウルスの化石が多数発見されていることから、おそらく本種のもと考えて間違いのないでしょう。カマラサウルスとは「小室をもつトカゲ」の意味で、背骨の中に中空の小部屋を持つことに由来する名前です。

さて、大腿骨の長さから推定すると、このカマラサウルスは十分に成長した個体で、体長16m、体重は20t(乗用車約20台分)を越えていたものと推定されます。

2 ハドロサウルスの化石



ハドロサウルスの化石は、大腿骨、肋骨、下あご、脊椎骨など19点を展示しています。ハドロサウルスは中生代後期の白亜紀に繁栄した恐竜で、これらはアメリカ合衆国モンタナ州で産出したものです。写真は下あごの化石(長さ38cm)ですが、歯もついており、その形状から草食性の恐竜であったことがわかります。

ところで、佐賀県から恐竜の化石が産出する可能性はあるのでしょうか。化石はその時代に堆積した地層の中から産出します。残念ながら佐賀県には中生代の地層は存在しないので、恐竜の化石が産出する可能性はまず無いと言えるでしょう。

(学芸員 中原正登)

常設展示案内

平成5年度 美術館新収蔵品展から

会期：3月26日(土)～5月15日(日)

佐賀県立美術館の新しい収蔵作品は、日本画、洋画、版画、工芸では金工に染織と多種多彩。時代も近代(明治時代)から現代までにわたり、幅広い視点で「佐賀のアート・シーン 今昔」をとらえる努力を続けています。

日本画の高取稚成は慶応3年(1867)生まれ、最後の純土佐派の画家として知られ、朝廷や武家の礼式・典故・官職などの有職故実(ゆうそくこじつ)に造詣が深く文展に出品。同展審査員をつとめる一方、東宮職嘱託の職務に励んだ人物です。中国殿の賢相伊尹の故事にちなんだとおもわれる画題「伊衡勅使の図」は、繊細で格調の高い筆致で日本の雅やかな情景に移されています。

洋画家五百城文哉(いおきふんさい)は、水戸藩士の出身ですが、百武・久米・岡田らと同時代に活動して、重厚な画風の古典的な作品を描いています。作品の数が少なく、知られざる明治の画家のひとりです。

明治天皇像を描いた高木背水(たかぎはいすい)は佐賀生まれ、岡田三郎助を知り白馬会に加わります。イギリスでの洋画修行の成果が展示中の「婦人肖像」(大正初年)でしょう。風景画の多い中で、この美しい女性像は、「高木背水展」(佐賀県立博物館、1982)でも評判の作品でした。

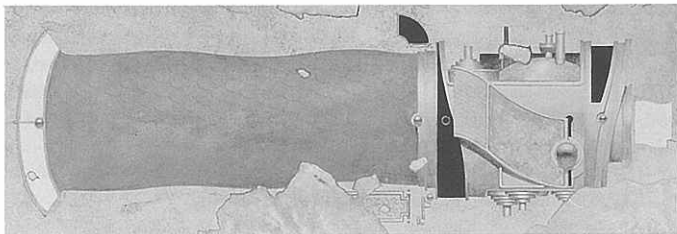
黒田清輝から久米桂一郎宛の明治31年3月11日付の書簡は、ともに慶応2年(1866)生まれという白馬会の同志二人が、官展系主流派の「博覧会」、「明治美術会」にまむこから反旗をひるがえし、新進気鋭のグループの心意気を記した興味

深い資料です。日本画に対して地歩を固めつつあった洋画、その内部でもわずか半世紀あまりで新しい波の頭頂を迎えるエネルギーあふれる明治時代、誇り高き画家たちの熱烈なアジェンションが聞こえます。

岡田三郎助を頼みに絵画修行を始めた古沢岩美(1912～)は、ダリに魅せられて以来、エロチックな女体をモチーフにした独得のシュールな世界を描いてきました。80歳を越えた今も健筆は衰えず、第二次大戦での中国出兵そして敗戦という加害者と被害者の二面性を銅版画30枚にこめた「修羅餓鬼」(1960～93)を完成させています。今年は大回顧展となる「一鮮烈と耽美の世界—古沢岩美展」が美術館で開催されます。(7月6日～24日)

若干26歳で事故死した野村昭嘉(のむらあきよし)の作品集は、美術館では異例のことです。雑誌の表紙を飾るグラフィックデザインの仕事で認められてきた時期の不幸な出来事でしたが、わずか50歳あまりの遺作で構成された昨年の回顧展は、壁画のような淡く古色をおびた画面や、静謐で幻想的なモチーフの中に完成された画風の片鱗をのぞかせた独特の世界を展開して興味深いものでした。展示中の作品から日本画、洋画、デザインのジャンルをこえた不思議な世界をのぞいてみませんか。(写真は野村昭嘉作品、1990)

工芸では、金工家石田英一の昭和10年代から20年代にかけての作品3点と明治以降の鍋島織通を紹介中。1号B展示室では「回顧展展グラフィックデザイン」も開催中です。(学芸員 宮原香南)



資料紹介

浜玉町谷口古墳の遺物出土状況について

浜玉町大字谷口字立中に所在する谷口古墳は全長約77mの前方後円墳であり、後円部に2基の竪穴系横口式石室と前方部に1基の舟形石棺を有する。1908（明治41）年11月23日に地権者の江口斧三郎氏ら地元住民によって後円部の東石室が発掘され、長持形石棺の内部から三角縁三神三獣獣帯鏡2面・位至三公鏡1面・振文鏡1面・変形四獣鏡1面・硬玉製勾玉5個・ガラス製勾玉3個・碧玉製管玉292個・ガラス製小玉1553個・緑色凝灰岩製石劍11個が、棺外から鉄劍・鉄刀類10数口・鉄鍬の束・袋穂鉄斧1口が出土している。続いて翌24日には西石室が発掘され、やはり長持形石棺内から三角縁三神三獣獣帯鏡2面と鉄劍ないし鉄刀1口が出土している（梅原1953）。

その出土状況については、1939（昭和14）年の京都大学教授梅原未治氏による聞き取り調査の際江口氏が示したとされる東棺の遺物出土状況図（図1、梅原1953掲載）がこれまでほとんど唯一の資料とされてきた。梅原氏の報文によれば、この図は「（江口氏が）早く丹念に描いて置いた東石室の十分の一の圖」と言うから、作図の時期は1939年よりはかなり以前と判るが、「棺内にあったことは間違いない、或いは足の両隅にあったようにも思うが、その正しい所在位置は既にはっきりと記憶していない」と江口氏の語る石劍が、やや不明確な感じで足元の両側に表現してある点から見れば、ある程度記憶が曖昧になってから作成したのではないと思われる。もっともこの図には梅原氏の註が付けてあって、「この第四圖の氏の描いた棺内の状態の外は、石棺なり室の工合など、筆者の手で若干の修正を加えた。」とあるから、石棺や「鏡」・「管玉」等の註記だけでなく、特に石劍らしきものについては梅原氏が付け加えた可能性も皆無とは言えない。また5面出土した鏡は被葬者の頭辺を囲むように立てかけられていたことが判るが、いずれもほぼ同大で鏡種の識別はできない。

このように各遺物の出土位置についてはなお不詳の点が少ないのであるが、最近になってこ

の点に関する新資料の発見が相次いだので、ここに紹介し、大方の参考に供したい。

ひとつは1913（大正2）年2月15日付福岡日日新聞に掲載された「肥前一圓に於る園造と其古墳（二）」の挿図である（図2）。これについてはすでに家田淳一氏の紹介があるが（家田編1991）、この連載記事は宮内省嘱託増田于信氏による東肥前一圓の古跡踏査の概要を報じたもので、本文は増田氏に随行したかと思われる記者の取材記の体裁をとる。この図の作者や作成時期については特定できないが、少なくとも谷口古墳の発掘から4年3ヶ月以内に作成されている点で重要である。この図でまず注目すべきは江口氏の図で不明確であった石劍（シャリン石）が被葬者の頭部右側に描かれていることである。さらに5面の鏡には明らかに大小があり、三角縁神獣鏡と思われる大型鏡2面が小口石に、その他の小型鏡3面が右側石に立て掛けてある。勾玉の位置は変わらないが、管玉は手首付近の一群がなく、逆に頭部と両体側、それに左足の脇と足元に認められる。その他本文には「大石棺外の右側頭辺に鉄劍6振及び矢の根数十を排列しありたる」とあってその位置・員数が具体的である。西石棺の図はないが、棺内の刀劍については本文に「劍1振」とある。

もうひとつは玉島村にほど近い鬼塚村石志（現在の唐津市石志）の郷土史家田代頼治氏（1882～1956）の作成した図である（図3）。これは田代氏が周辺の遺跡踏査に際して作成したと思われる半紙39枚ほどの写生帳の中に描かれたものである。この写生帳の表紙には「古墳発掘物 一部直写 鬼塚尋常高等小学校 田代頼治」とあるから、田代氏が鬼塚尋常高等小学校から転出する1914（大正3）年までの間に作成した可能性が高い。谷口古墳関係は冒頭の十枚であり、遺構・遺物の順に毛筆で清書されている。

図3右が東石棺の遺物出土状況である。上記2図と比べると簡略なものであり、鏡が3面しか表現されていない点など遺漏も目に付くが、石劍は

はっきりと足元に描かれている。図3左は西石棺の遺物出土状況図としては唯一のものになるが、鏡2面が頭部両側に描かれている。これは「二面の大鏡は共にやはり、上向伸展葬された遺骸の頭の方にあった」とする江口氏の証言(梅原1953)に符合する。

以上図1～3を通視すればいずれにも他にはない特徴が見られ、それぞれ別個に作成されたものと思われる。全体的には年代的にも古く、鏡配置などに具体性が感じられる図2に信憑性を認めたいが、石剣の出土位置についてはすでに大正初期に異説があったことが注意される。

註

1 本資料の存在については果教委文化課小宮睦之氏よりご教示いただいた。

参考文献

家田淳一編1991『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』浜玉町教育委員会

梅原末治1952「肥前玉島村谷口の古墳」『佐賀県文化財調査報告書』第2輯 佐賀県教育委員会

本稿の作成にあたっては、田代頼治氏の御子息正敏氏、仲介の労をお取り頂いた小宮睦之氏に大変お世話になりました。記して厚くお礼申し上げます。(資料係長 蒲原宏行)

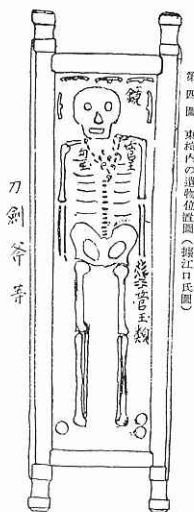


図1 梅原1953所載図

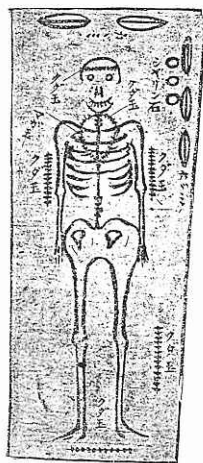


図2 福岡日日新聞所載図

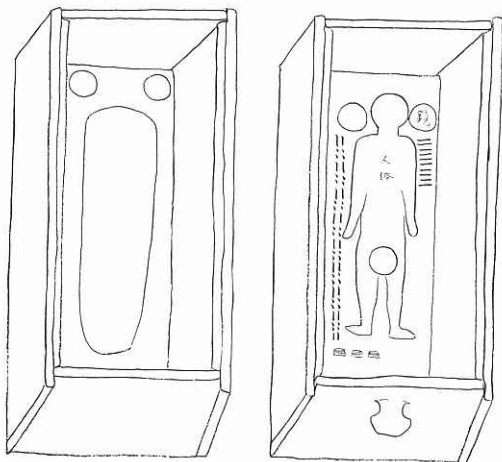


図3 「古墳発掘物」所載図(左 西石棺、右 東石棺)

調査ノート

平成5年度 県内社寺調査 概要報告

博物館で実施している寺院、神社の文化財調査も今年度で2年目に入った。当初は平成4年度より3ヶ年の計画であったが、1年間の延長が認められて合計4ヶ年となり、最終年度は補充調査と報告書の作成に充てることとなった。

調査全体の主旨や内容、メンバーなどについては平成4年度分について報告した館報102号に詳しいため、ここでは今年度調査の成果を中心として報告する。

〈平成5年度の調査について〉

・調査区域と対象の社寺

今年度の調査は、佐賀県を南北に分ける脊振山系を中心として行った。調査区域は武雄市、鳥栖市、多久市、三養基郡、神埼郡、佐賀郡の一部の20市町村にわたった。

所在確認のための1次調査は83ヶ所、重要な箇所について詳細に調査する2次調査は20ヶ所にのぼった。

・調査の成果

昨年度に続き、仏像・神像を中心として重要な資料が多数確認された。主なものは下記のとおり。

- 大日如来坐像 (妙福寺) 平安時代 11世紀
- 女神像 (白角折神社) 南北朝時代 1346年
- 後藤貴明像 (貴明寺) 桃山時代 1588年
- 九条袈裟 (東妙寺) 南北朝時代 1390年
- 禪宗列祖図 (少林寺) 江戸時代 17世紀

平成4年度の調査に関して、貴重な資料が多く確認された小城町・三岳寺について常設特別展「三岳寺の美術」を開催し、広く一般に報告した。また唐津市・夕日観音堂の千手観音立像 (平安時代中期)、小城町・三岳寺の葉師如来坐像ほか2軀 (鎌倉時代 1294年) の2件が平成5年3月31日付で佐賀県重要文化財に指定された。成果の一部として付記する。 (学芸員 竹下正博)



大日如来坐像 (妙福寺)



後藤貴明像 (貴明寺)



禪宗列祖図 (少林寺) 部分

あ い さ つ

館長 山本 敏秋

先日、新緑に満ちあふれた博物館周辺の木々の間を散策しました。鳥の声や遠く広がるお堀の水とまわりの若葉がとても気持ちいを和ませてくれます。その上、今年からは佐賀が生んだ有名な彫刻家古賀忠雄氏の名作が、桜や楠の青葉の中やお堀のそばの木々の間に点々と配置されて、またひとつ楽しみが増えました。

考えてみますと、市内の中心部に位置しながらこのようなすばらしい環境にある博物館・美術館は全国でもそう多くはないのではないのでしょうか。

しかしながら当館の利用状況を見る限り、その環境のすばらしさと裏腹な現実を実感せざるを得ません。考えてみますと、中学生になる私の息子も図書館にはよく本を借りに行ったりしていますが、博物館に行ったということは聞いたことがありません。なぜこのように博物館には足が向かないのでしょうか。何が欠けているのでしょうか。



そもそも博物館の役割は自然・歴史・美術・民俗等の資料について収集・保管・研究・展示し、県民および国民各層の文化的欲求を満足させることだと言われています。すばらしい

個々の資料の価値を真に生かすためにも、我々は一人でも多くの方に観覧いただく努力をして参らねばならないことをあらためて強く感じる次第です。魅力ある博物館とはいかなるものか、今後十分検討して一歩でも近づければと思います。

どうか皆さんも一度古賀忠雄彫刻の森をゆっくりと散策し、ついでにふらりと博物館か美術館にお入り下さい。きっと何か美しいもの、懐しいものを発見されるのではないのでしょうか。

人事異動

4月1日付人事異動で下記のとおり職員の異動がありました。

転入

館長 山本 敏秋(県議会事務局長より)
学芸課 課長 中牟田賢治(文化財課課長補佐より)
総務課 主査 小林 静枝(県総合運動場主査より)

転出

館長 飯盛 邦尚(退職)
総務課 主査 東島 幸子(退職)
学芸課 課長 木下 巧(文化財課参事へ)

お知らせ

平成6年4月からNHK佐賀放送局の新しい企画画として、「ひるまえてれび」(11時45分～)において毎週水曜日に、「ふれあいギャラリー」のコーナーが設けられました。

このコーナーの放映時間は約5分。内容は県内の公・私立の博物館・美術館及びその相当施設を中心とした展覧会等の催物の紹介です。

第1回は、4月5日、当館の「平成5年度美術館新収蔵品展」がとりあげられました。担当学芸

員の解説にしたがい、美術館展示室内において事前に収録されたものでした。その後、九州陶磁文化館、名護屋城博物館とつきつぎに紹介されています。なお、5月以降は、基本的には、放送局スタジオからの、学芸員等の出演による生の放映となるようです。

今後、当館の常設展(特別展示)、企画展をはじめ新聞社との共催展などを、他館の展覧会などともに紹介していただく予定です。

行事案内

4月⇒6月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
※	休	日	休	日	休	日

日	月	火	水	木	金	土
1	2	③	④	⑤	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

カレンダー内、□印は休館日

常設展				展覧会	
観覧料 大人200(150) 大学150(100) ※高校生以下は無料、()内20名以上団体				枠内に明記する以外は無料	
博物館				美術館	
1号展	2号展	3号展	大 展	1号A日展	2号展 3号展
4/9 自然史 水辺の生きものたち(Ⅰ) ほか	4/9 歴史・考古 近世佐賀藩の成立 ほか	4/9 脊振山系の仏教美術 5/22	4/9 民俗 竹民俗の民俗 ほか	5/15 国際展 グラフィックデザイン 5/15	5/15 平成5年度 新成5年度 蔵品展 5/15
5/22	5/22	5/22	5/22	5/27 準備	準備
5/27 自然史 水辺の生きものたち(Ⅱ) ほか	5/27 歴史・考古 長崎の警備 ほか	5/27 平成5年度 新収蔵品展 5/27	5/27 民俗 絵馬にみる農具 ほか	5/27 有染 色の明 海 小川美彦	5/27 風の画家 中島 深の世界展 一源氏物語のひと 5/19休～5/29日佐賀新聞社 梧竹・蒼海顕彰 第2回 佐賀県書道展 前期 6/3(日)～6/5(日) 佐賀新聞社 後期 6/8(水)～6/10(金) 第77回 佐賀美術協会展 6/23(木)～7/3(日) 佐賀美術協会
AIS展II 1994 5/3(水)～5/22(日) グループSUS				第22回 大空書道展 5/17(水)～5/22(日) 佐賀県書道教育連盟	
第7回 九州国画会佐賀支部写真展 5/24(水)～5/29(日)九州国画会佐賀支部					

日誌

古賀忠雄彫刻の森開園式

平成4年度より総事業費約8670万円をかけて、当館が建設を進めてきました「古賀忠雄彫刻の森」が完成し、3月29日美術館周辺の佐賀城公園内にオープンしました。当日は午前10時より関係者約50名が参列して開園式が行われ、福島善三郎県出納長のあいさつの後テープカットが行われました。

この彫刻の森は佐賀県出身で我が国を代表する彫刻家古賀忠雄氏の作品により一層親しんでもらおうと約1万7千平方メートルの公園内に26点のブロンズ像が配置されています。古賀氏の作品には素朴で力強い男性像が多いのですが、中には

優しい女性像や家庭の団楽を表した作品もちりばめられており、公園の散策にまた一つ楽しみが加わったものと自負しています。ぜひご来園下さい。



佐賀県立博物館・美術館報 第105号

平成6年5月16日

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840 佐賀市城内1-15-23 ☎0952・24・3947 〆0952・25・7006

印刷 日之出印刷株式会社